



とちぎ協働デザインリーグのこれから(その4) 理事長 三橋 伸夫

平成 19 年 1 月に、とちぎ協働デザインリーグが設立されて 10 年余が経過しました。この間、県内には多くの NPO 法人が活動を始め、多様な分野で社会貢献活動が行われるようになりました。

栃木県行政においても、県政重点戦略「とちぎ元気発信プラン」(平成 28~32 年度)において、次代を拓く人づくり等 5 つの重点戦略の実現に向けて「多様な主体との協働」が掲げられています。

こうした背景の下、NPO 法人のみならず、地域団体、企業および行政の間での協働の取組は一般的になってきています。しかし、さまざまな格差の拡大は社会の分断を招来し、それとともに、個々の主体間の関係をも弱体化させつつあります。また、協働の取組には欠かせないボランティア活動、社会貢献活動については、市民あるいは地域団体、企業などの参加に頭うちの傾向がみられるようになっており、継続的な啓発活動が求められています。他方、社会経済的環境や国際情勢などの変化もあいまって、新たな社会的問題、地域的問題が生まれてきており、それらへの対処は栃木県においても喫緊の課題となっています。さらに、こうした社会的な要請は以前にも増して高度化、複雑化し、解決に向けた取組の専門性を高めており、協働をますます必要不可欠なものとしています。この課題解決に向け、一般化しつつある協働の内容をさらに発展させ、創造

性、魅力を高める必要があります。それは弱体化しつつある個々の主体間の関係を修復するとともに、新たな関係を構築して、社会的な共通価値としての社会的包摂を実現していくことに他なりません。

とちぎ協働デザインリーグは、市民社会の健全な発展を希求する市民、市民活動団体、地域団体、企業ならびに行政機関等との高い質をもった協働によるまちづくりを推進していく中間支援団体として、調査研究分野における学術的専門性を活動基盤におき、さまざまな分野における個別課題の解決に向けて社会的役割をより一層効果的に担い、また、社会的責任を果たすべく NPO 法人認証をめざすこととしたいと考えています。

法人化にあたって留意すべき点を述べると以下のようになります。なお、ここで事業とは、リーグが自主的に取り組むリーグ事業と、とちぎボランティア NPO センターの管理運営業務に係るぼ・ぼ・ら事業の両者を指すものです。

第一に、栃木県下における社会的課題、地域的課題に即応すべくリーグが取り組む事業を、理事会が的確に掌握し方向づける必要があります。このため、従来は年 3 回開催していた通常理事会に加え、随時必要に応じて常任理事会を組織し、これにあたります。特に、県域中間支援センターであるボランティア NPO センターの専門的かつ広域的な運営を、より確かなものとするよう、県民の負託に応えたいと思います。

第二に、これまでも年度末に事業報告を編集・刊行していますが、当該年度の事業実施評価と残された課題査定を従来に増して厳密に行い、事業の新設、統合、廃止などを自覚的プロセスの下に行います。中間支援団体としてのリーグの法人評価の仕組みも、時期を措かず実施したいと考えています。

第三に、前稿においてもふれたことですが、営利事業等を含むリーグ事業の充実をめざすとともに、ぼ・ぼ・ら事業との有機的連携を図りたいと考えます。このため、リーグスタッフの役割分担、専門性の強化および勤務体制の改革に取り組むこととしたいと思います。

なお、法人化を機に、これまでの 10 年間継続的に編成されてきた理事会をさらに充実させて、これら諸点の確実な実施を担保してまいります。

これまで、ぼ・ぼ・ら管理運営の一環として NPO 法人設立相談業務を担当して来たリーグが、ここに来て NPO 法人をめざすのは遅きに失した感がありますが、中間支援活動の持続可能性を高めるものであると念じてご容赦願います。

ライフステージにプラスαをもたらす もうひとつの活動

とちぎ協働デザインリーグ 主任研究員 小針 協子

■ターゲット（対象）は誰か？

社会貢献活動の促進にあたり、入職当初は、老若男女全方位に向けてという意識でいました。が、2009年に団塊世代が60歳以上となり、また平均寿命の伸長に伴い、シニアのセカンドステージが社会課題として明確に浮かび上がりました。そこで、事業を進めるときにはターゲットを明確にする必要性もあり、シニア向けという意識に切り替えて、事例の収集及び情報発信に努めてきました。

そうしてシニアのセカンドライフをより豊かなものとするべく取り組んできましたが、正面から向き合うほどに、もっと若い頃からの取組が重要だという課題に行き当たりました。もちろん、60歳近くになってからでも遅いということはなく、社会貢献活動以外でセカンドステージを満喫するというライフスタイルもあります。

では、今後の取組としてどのようなことが考えられるのでしょうか？

■プラスαは、どこにあるのか？

仕事一筋で頑張ってきた人たちが、退職と同時に行き場を失ってしまうのでは意味がありません。そのようなことが起きないようにするために、会社や様々な場所でシニア向けにライフプラン支援セミナー等が実施されています。それらは、30代40代では聞く耳をもちにくいということもあるでしょう。しかし、社会貢献活動は、そういった類のものではありません。

ひとつには、会社員が職業への意欲を高くもちながらいきいきと成長していくために、職業以外のもうひとつの活動を推奨することがあります。本当に早い時期から、もうひとつの活動の名刺をもてるような取組を進めていければ、プラスαが広がり深まります。

もうひとつは、高校生や学生を中心とした取組です。2014年5月に発表された「増田レポート」(※)は県内市町の名もあがり、衝撃的なものでした。

※「日本創成会議」人口減少問題検討分科会が、2040年までに全国約1800市町村のうち約半数(896市町村)が消滅する恐れがあると発表した。

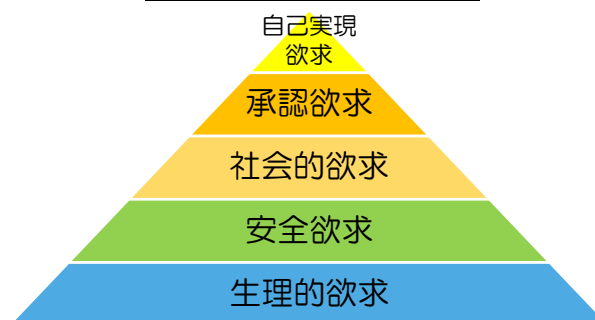
ここで一気に若者の存在への関心が高まりました。高齢者には、限界集落になりつつある田舎や農村に移住してきてほしい、若者には、地域に誇りをもって育った場所に戻り、ふるさとを支えてほしいという取組が徐々に増えてきました。

若者が、学業に専念することは非常に大切です。学校内での学びと人間関係は、未来に大きな影響をもたらします。それと同時に、学校外での活動と人間関係は、学びの意欲を高め、今後の人生に大きな影響を与える可能性があります。

高校生や大学生の学業のかたわらでのもうひとつの活動、そして職業を得てからの2つめの名刺、それらをもって人生のセカンドステージを迎えれば、さらに豊かな生涯現役の姿が見えてくると考えます。

■豊かな人生とは？

マズローの欲求5段階説



大震災後、人々の真の幸せとは何だろうということを考えざるを得ませんでした。マズローの欲求5段階説が、様々な場面で取上げられました。

マズローは、下位の欲求が達成されれば、その上の欲求をもつとっています。一番上にあるのが「自己実現欲求」です。この欲求を叶えるための場が、社会貢献活動にはあります。自らの手で、自己の意思で課題解決に寄与することは、自己実現にほかならないと考えます。

ある会社の上司は、社員のボランティア活動を推奨します。理由は、人間的な成長と本業への意欲の向上です。ある高校生も、ボランティアをすることで学業への意欲が高まると述べています。

他者貢献がもたらす自己実現に着目し、多くの人が「プラスα」を得られるよう充実したつなぎの場を創出することは、私たちの役目でもあり、志新たに尽力してまいります。

～NPOのための広報カススキルアップセミナー～にみる「伝えるコツ」

とちぎ協働デザインリーグ 研究員 横塚 恭宏 町田 英俊 小針 協子

◆NPO広報力向上委員会とは

NPO が広報力をつけることにより、活動のポテンシャルを広げ、かつ社会に対する情報公開の充実を図るという視点で立ち上げた会で、2014年に10周年を迎えています。

委員会構成メンバーの所属は、認定 NPO 法人日本 NPO センターや株式会社電通等で、伝えるコツセミナーの講師やテキストの編集その他を担っています。

◆伝えるコツセミナーとリーグ

「伝えるコツを身につけよう～NPOのための広報カススキルアップセミナー～」は、全国各地からの要望に応え、委員会が編集作成したテキストを使用して開催されます。テキストは、「電通+NPO 広報力向上委員会『伝えるコツ』テキストより転載」と付記すれば、自由に複製して使えます。

また、テキストは第3版まで発行され、とちぎ協働デザインリーグは、その全てのテキストでセミナーを開催してきました（下記参照）。

伝えるコツのテキスト	リーグの動き
平成 16 年 9 月 初版発行	平成 19 年 設立 平成 20 年 7 月 セミナー開催
平成 22 年 9 月 改訂版発行	平成 23 年 12 月 セミナー開催
平成 27 年 11 月 第 3 版発行	平成 29 年 10 月 セミナー開催

NPO 支援プログラム「伝えるコツ」は、28 年度「グッドデザイン・ベスト 100」（分類：地域・コミュニティづくり／社会貢献活動）を受賞しています。（<https://www.g-mark.org/about/>）

◆今年度のセミナー

日時：平成 29 年 10 月 12 日（木）10 時～

会場：地方職員共済組合栃木県職員会館
ニューみくら

講師：株式会社電通戦略クリエイティブ・ディレクター／コピーライター 杉谷有二氏
株式会社電通中部支部統括・戦略クリエイティブ・ディレクター 岡本達也氏

このセミナーでは、誰かに何かを伝えたいとき

に一番大切なことは、「伝えたい内容」よりも先に、「自分を見つめること」と徹底してたたきこまれ、次のようなステップで考え方を整理します。



- ①自分を見つめることから始める。
- ②相手から自分がどう見えているかを考える。
- ③何をしたいのか、団体の目的を明確にする。
- ④団体の課題が何なのかを、はっきりさせる。
- ⑤「誰に」「何を」伝えたいのか整理する。
- ⑥自分たちの活動を[ひとこと]で表してみる。

これらを踏まえて実際にチラシを作成し、その後、各自のチラシにつき、講師 2 人からの講評をいただきました。



◆まとめ

「伝える」というコミュニケーションは、チラシのみでなく、様々な手法があります。誰に何を伝えるかにより、その手法を選ぶ細やかな心配りが重要だと考えます。

情報があふれている時代だからこそ、選ばれる（読んでもらえる・聞いてもらえる）工夫を凝らさなければ埋もれてしまう恐れがあります。

だからこそ、NPO が「自分は何者で、どうしてこれを伝えたいのか」、そういった事柄を「短時間で、あるいは短い言葉で、的確に」表すことができるよう日頃からの研鑽と、コミュニケーションのある学びの機会の必要性を痛感しました。

藤本信義先生を偲ぶ集い



平成 29 年 12 月 16 日（土）、宇都宮大学峰が丘講堂にて、とちぎ協働デザインリーグ顧問藤本信義氏の逝去に伴う「宇都宮大学名誉教授藤本信義先生を偲ぶ集い」が執り行われました。穏やかな冬の日差しの下、藤本氏にご縁のある約 170 名の方々が集い、在りし日の藤本氏を偲びました。

第 1 部は、「藤本先生を『想う』」として、黙祷と献花ののち、栃木県知事福田富一氏、宇都宮市長佐藤栄一氏、宇都宮大学長石田朋靖氏からの追悼の言葉。続いて、藤本氏の業績紹介とご家族への遺稿集および写真集の贈呈があり、藤本氏ご夫人からもご挨拶をいただきました。



第 2 部は、「藤本先生を『語る』」として、藤本氏ゆかりの方々からお言葉をいただきました。会場正面には献花台が設けられ、集う方が三々五々献花されました。藤本氏が好んで聴かれたクラシック音楽が流れる中、スクリーンにはお若い研究者時代から近影まで、懐かしい様々な写真が映し出され、いまだに身近におられるような感覚を覚えるようでした。休憩時間には、カフェコーナーから藤本氏の大好きなコーヒーの香りが漂い、定番の沖縄土産とコーヒーを手に、藤本氏を偲ぶ輪が、あちこちに出来ました。

平成 28 年 3 月にとちぎボランティア NPO センター所長を退任され、同年 5 月にはとちぎ協働デザインリーグ理事長から顧問となり、病氣療養と回復に努められていた藤本氏は、常にリーグとスタッフを気にかけてくださっていた、と伺いました。指標となる方を失った実感がまだわきませんが、留まるわけにもいきません。ご冥福を祈るとともに、三橋理事長を筆頭に、理事各位とともに、スタッフ一丸となり、歩みを進めてまいりたいと思います。